

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
1 授業の規律を確立し、授業改善を進めて、基礎・基本の定着を図る。	① 教材や指導方法を工夫し、わかりやすい丁寧な授業を実施する。	教務課 各教科	不登校を経験しているなど多様な生徒がいるため、学力差が大きい。	【努力指標】 授業改善に取り組み、わかりやすい授業を実施し、生徒の理解力を深める。	授業改善に取り組み、授業の内容が理解できる生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	前期・後期末の2回調査 授業評価を活用 生徒
	② 考査期間中及び長期休業期間中に、成績不振者や欠席がちな生徒に学力補充を行い、基礎学力の定着に資する。	教務課 各教科	欠席がちな生徒の多くが理解力不足であり、さらなる欠席につながり、成績不振や欠時オーバーをもたらしている。	【成果指標】 各教科担当者の指名した生徒が学力補充に休まず参加した。	学力補充に参加した生徒の割合が、 A 95%以上である B 85%以上である C 75%以上である D 75%未満である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	1月末に調査 教員
2 キャリア教育を推進し、個々の進路実現を目指す。	① 本校教育振興会員と学校の繋がりを強め、就職・アルバイトの支援を依頼する。	総務課	会費納入・総会参加者が減少し、会員と学校の繋がりが充分とはいえない。	【努力指標】 「学校だより」などを利用し、学校の現状を会員に知ってもらおう手立てを講じる。	教育振興会会員への連絡が A 年間5回以上である B 年間4回である C 年間3回である D 年間2回以下である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	年度末に調査
	② 就業やインターンシップ等の体験を通して、勤労観・職業観を育み、進路選択の能力を高める。	進路課 各担任	就業率は高いが、その経験が進路選択と結びついていない。	【成果指標】 就業体験・進路講話を通して生徒が勤労観・職業観を身につけ、自立する能力の向上が見られた。	就業体験や進路講話を通して、意識・能力が高まったと感じた生徒の割合が A 80%以上である B 65%以上である C 50%以上である D 50%未満である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	9月末、1月末に調査 生徒

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
3 学校生活全般を通して、コミュニケーション能力の向上を図る。	① 生徒会活動の活性化を通して、生徒間及び生徒・教員間の意思疎通の向上をはかる。	生徒指導課 (生徒会顧問)	一部には生徒会活動の活性化を望む生徒が存在しており、素地はあるが、具体的な活動に結びついていない。	【成果指標】 生徒会役員が主体となって行う挨拶運動や生徒への提案・情報提供の機会が増加した。	生徒会役員から生徒へのはたらきかけが、 A 毎月2回以上行われた。 B 毎月1回以上行われた。 C 年間6回以上行われた。 D 年間5回以下行われた。	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	年度末に調査
	② 教員自身の生徒理解能力とコミュニケーション能力を向上させ、生徒指導の円滑化をはかる。	生徒指導課	本校教員はこれまでも生徒への個別対応を丁寧に行ってきたが、多様な生徒への対応にはコミュニケーション面でさらなるスキルアップが求められている。	【成果指標】 生徒理解やコミュニケーションに関わる校内研修・情報交換会を毎月開催した。	対生徒コミュニケーション関連の校内研修を A 年間20回以上開催した。 B 年間12回以上開催した。 C 年間9回以上開催した。 D 年間8回以下開催した。	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	年度末に調査
4 基本的な生活習慣の確立に努め、心身の健康保持・増進を図る。	① 欠席・遅刻・早退を減らすために、生徒・保護者へのはたらきかけや、雇用主への協力依頼を工夫・徹底する。	生徒指導課 各担任	怠学傾向の生徒数は減少気味であるが、不登校傾向の生徒に体調不良や仕事の疲れを理由とした欠席・遅刻・早退が目につく。	【成果指標】 前年度に比べて意識的に欠席・遅刻等を減らすことができた生徒の割合が増えた。	前年度に比べて意識的に欠席・遅刻等を減らすことができた生徒の割合が A 95%以上である。 B 85%以上95%未満である。 C 75%以上85%未満である。 D 75%未満である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	9月末、1月末に調査 生徒
	② ストレスマネジメント教育の充実をはかり、ストレスへの対処能力の向上をめざす。	保健厚生課 教務課 各担任	保健室利用者は減少傾向にあるが、前年度の生活習慣に関する調査では、約6割の生徒が、「学校へ行きたくないと思うことが多かった」と答えている。	【成果指標】 「学校へ行きたくないと思うことが少なくなった」と答える生徒が増加した。	「学校へ行きたくないと思うことが少なくなった」と答える生徒の割合が、 A 80%以上である B 60%以上80%未満である C 40%以上60%未満である D 40%未満である	CまたはDの場合、取り組み方法を再検討する。	9月末、1月末に調査 生徒